令和６年９月２８日（土）

沢組（さわぐみ）遺跡発掘調査現地説明会資料

大津市市民部文化財保護課

○はじめに

沢組遺跡は大津市真野四丁目に位置する古墳～奈良時代の窯跡と考えられている遺跡です。周辺には唐臼山古窯跡や知原古窯跡などの6世紀後半～7世紀前半の須恵器窯が分布しており、沢組遺跡の周辺地域一帯で窯業生産が展開していたと考えられます（図1）。

本調査は真野浄水場改良更新事業に伴い、927㎡を対象に令和6年1月から実施しています。主な成果として古墳時代後期（6世紀代、約1500年前）の須恵器窯3基（1・3・4号窯）を検出しました。出土遺物は須恵器が多く、遺物整理用コンテナで50箱分出土しています。また、須恵器窯の窯壁も遺物整理用コンテナで30箱分出土しています。

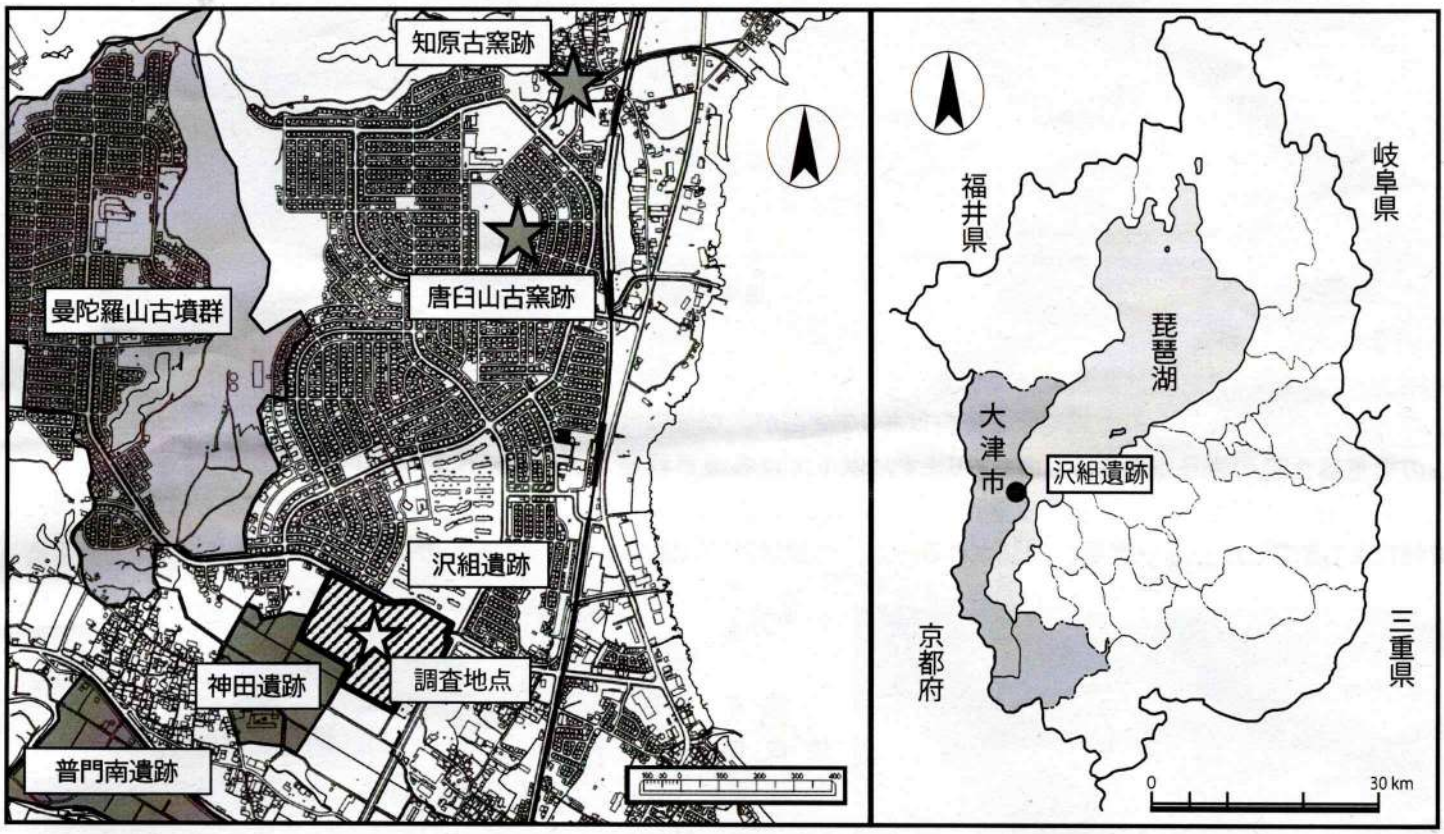

図1　沢組遺跡および周辺遺跡位置図

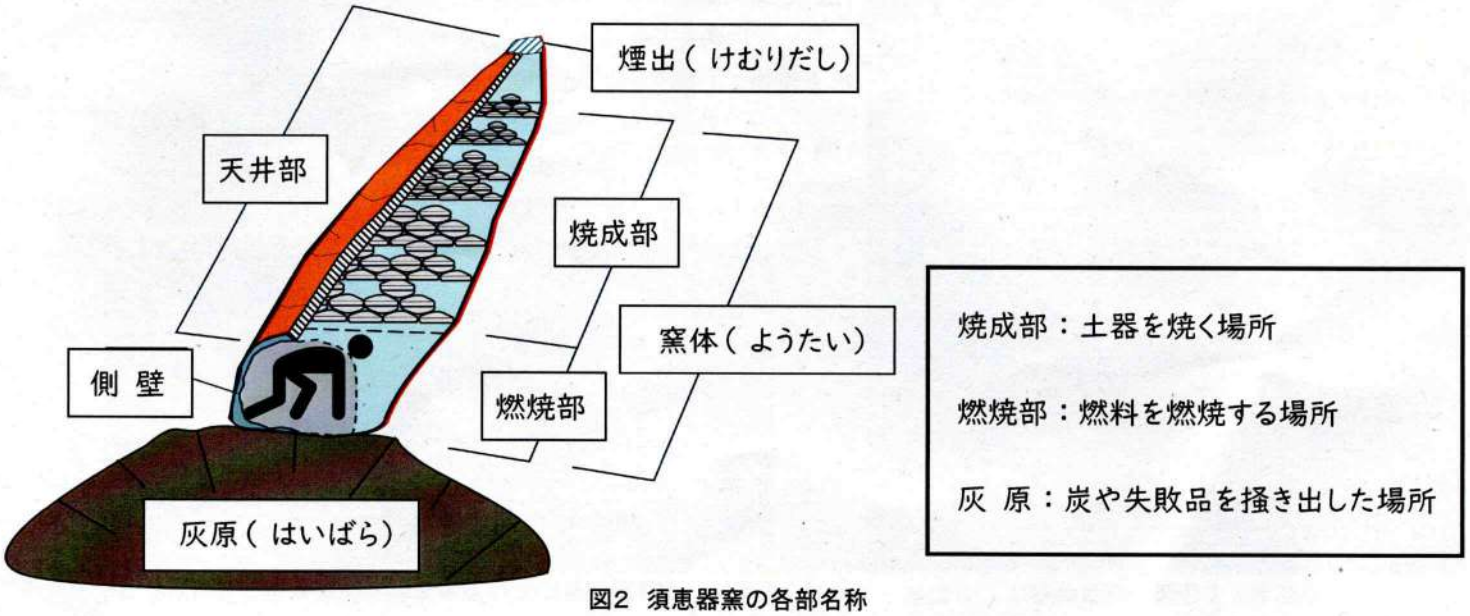

図2　須恵器窯の各部名称

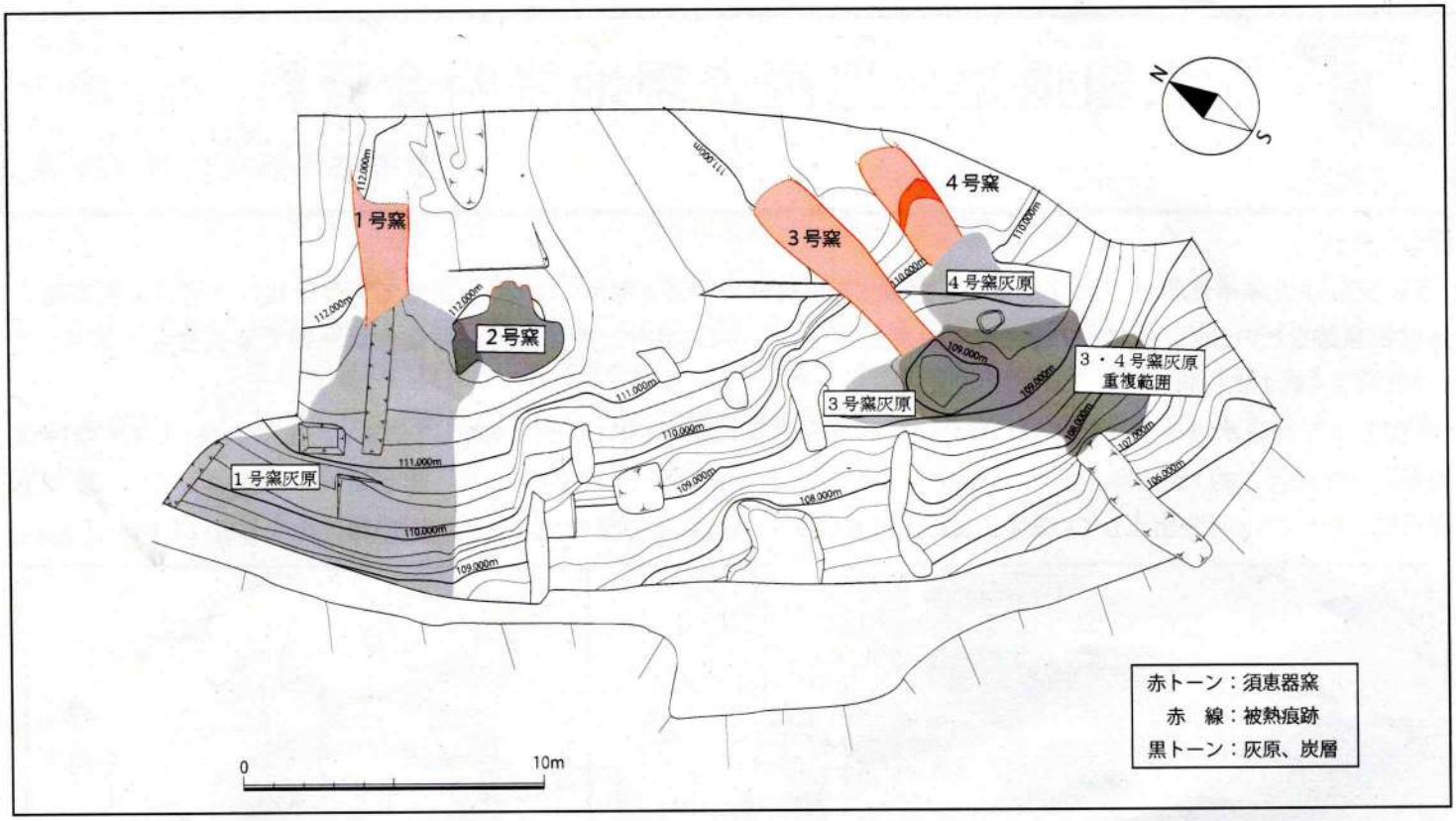

図３　遺構配置図

○調査成果の概要

3基の須恵器窯はそれぞれ窖窯（あながま）と呼ばれる斜面地を利用したトンネル状の窯です。後世の地形改変により煙出部分等が削平され、全長の判明する資料はありませんが、なかには床面から須恵器が多量に出土した窯もあり、その当時の須恵器生産の様子が分かるものもあります。以下では各須恵器窯の詳細を述べます。

なお、2号窯は須恵器窯とは異なる構造と須恵器の出土量が少ない点から、須恵器窯ではないと考えられます。しかし、被熱による赤変した土層や炭層が確認されるため、用途は不明であるもののなんらかの焼成施設だったと推定されます。

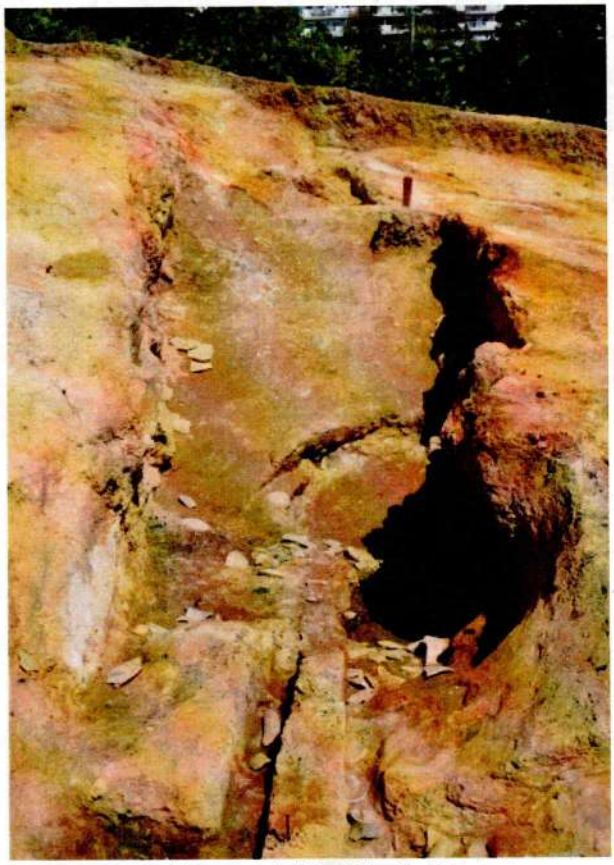

写真１　１号窯（南西から）

【1号窯】

規　　模：（残存長）5.0 m（残存高）0.6 m

燃 焼 部：平面長 2.0 m、幅 1.3 ～ 1.4 m。

焼 成 部：平面長 3.0 m、最大幅 1.7 m、床面の傾斜角は 17°。
天井および側壁に厚さ 15 cmのスサ（稲や藁といった繊維質の材料）入り粘土を貼っている状況を確認。

灰　　原：燃焼部から西側へ 9.0 mほどにかけて扇形に拡がる。
南側に隣接する2号窯を一部掘削して形成。

出土遺物：（窯体内）杯、甕、甑（こしき）、土錘（どすい）
（灰　原）杯、高杯、提瓶（ていへい）、瓿（はそう）、甕、器台、装飾付須恵器、土錘

操業時期：6世紀後半～末

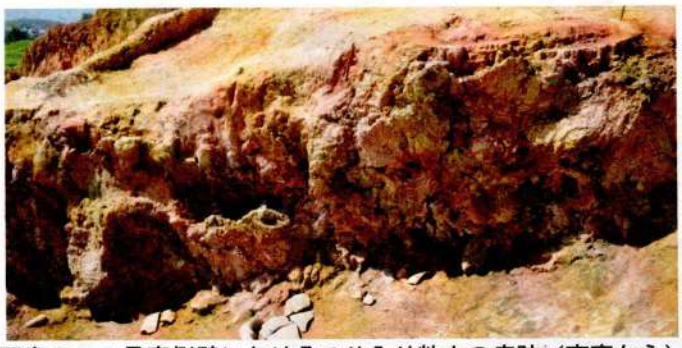

写真２　１号窯側壁におけるスサ入り粘土の痕跡（南東から）

【3号窯】

規　模：（残存長）6.7 m（残存高）0.8 m

燃焼部：平面長 1.5 m、幅 1.3 m 。

焼成部：平面長5.2 m、最大幅2.0 m、床面の傾斜角は27°。
床面には須恵器およそ 100 個体分が出土。

灰　原：4号窯と範囲が一部重複。
燃焼部から 11.0 m× 8.0 mに不整形に拡がる。

出土遺物：（窯体内）杯、高杯、壺、器台、装飾付須恵器
（灰　原）杯、高杯、壺、提瓶、瑳、甕、器台、
装飾付須恵器、土錘

操業時期：6世紀初頭～前半

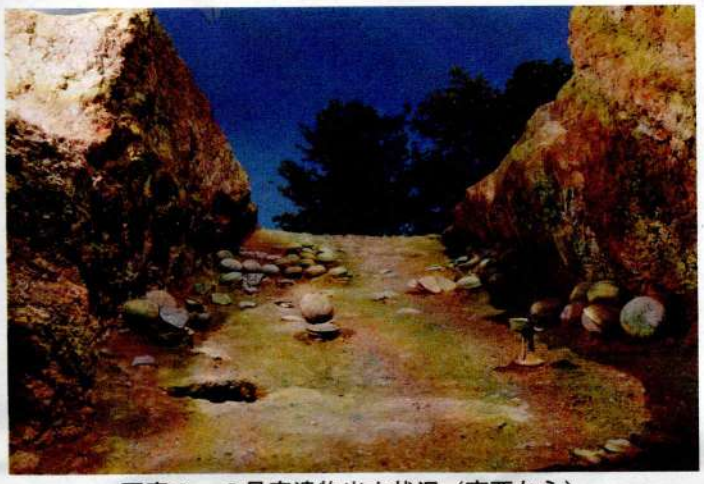

写真３　３号窯遺物出土状況（南西から）

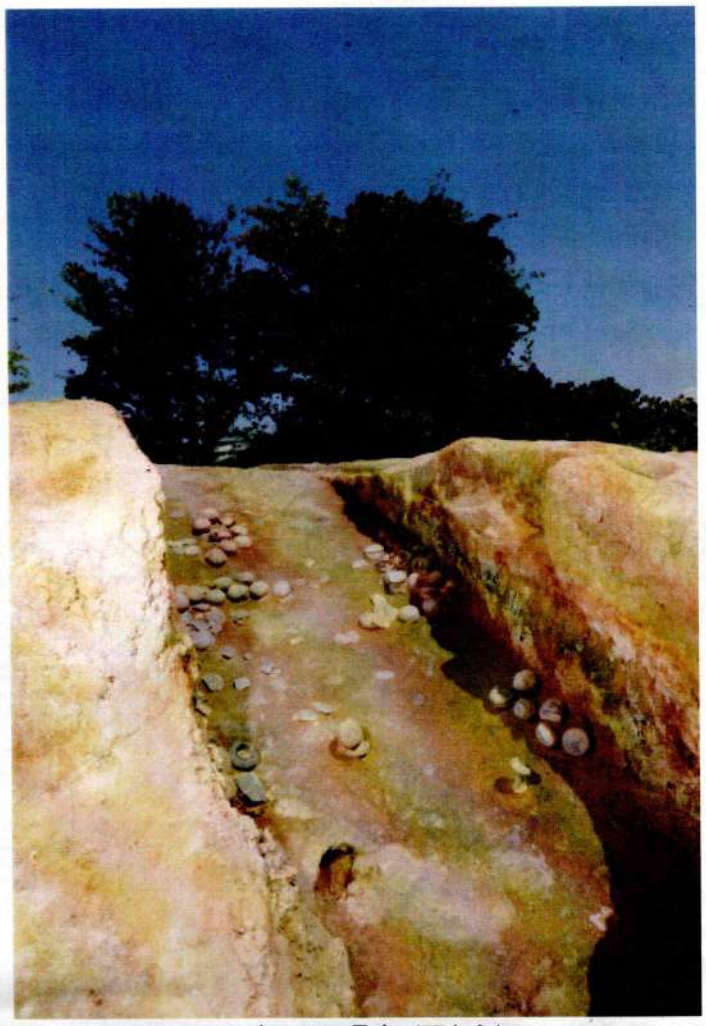

写真４　３号窯（西から）

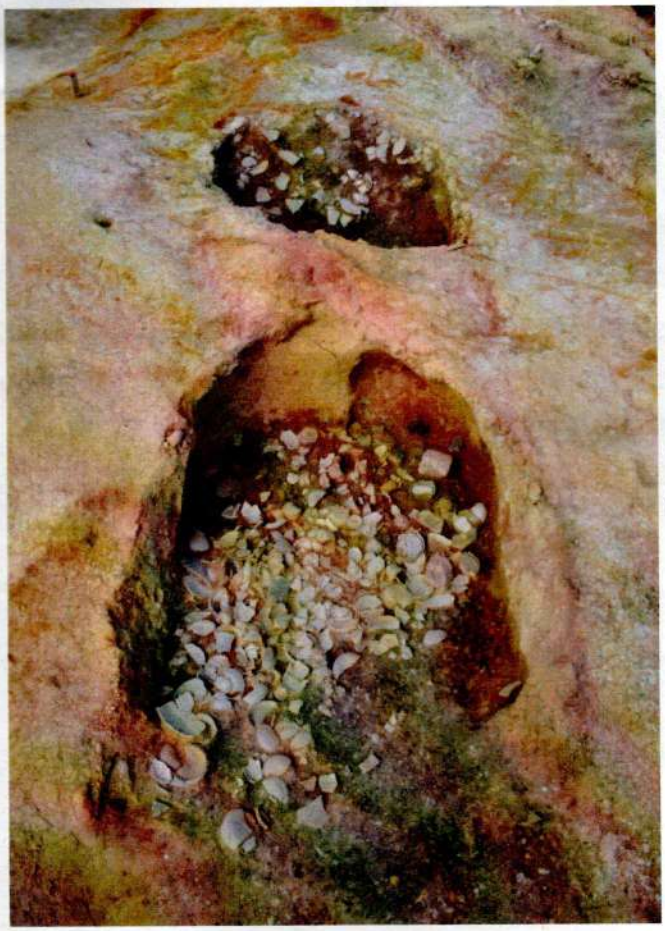

写真５　４号窯（南西から）

【4号窯】

規　模：（残存長）4.3 m　（残存高）0.5 m

燃焼部　：平面長 2.0 m、幅 1.7 m。焼成部との境では天井が残存。
天井と床面の比高は 0.5 m。
床面には焼成不良の須恵器の破片が多量に出土。

焼成部　：平面長 2.3 m、幅 1.7 m、床面の傾斜角は 20°。
床面には須恵器の破片が多量に出土。

灰　　原：燃焼部から9.0m×6.0mに不整形に拡がる。
3号窯灰原の上層に堆積する部分もある。

出土遺物：（窯体内）杯、高杯、甑、甕
（灰　原）杯、高杯、壺、甕、装飾付須恵器、土錘

操業時期：6世紀末～7世紀初頭

写真６　４号窯遺物出土状況（東から）

○本調査のまとめ

☆須恵器窯について

3基の構築順を検討したところ、出土須恵器の年代観や土層の堆積状況からみて、3号窯→1号窯→4号窯の順で構築されたと考えられます。

3基それぞれの窯で特筆すべき点としては、まず3号窯では焼成部の床面に残る須恵器が挙げられます。出土したおよそ100個体分のほとんどが完形品で、杯や壺は蓋と身がセットで残っていることから、当時の窯詰の状態を示すと考えられます。これらの須恵器は焼成途中で天井が崩落したことによって窯体内に残ったものと想定されます。また、これらの資料から窯詰の方法が一部復元可能で、打ち欠いた杯蓋を焼台として床面に並べ、その上に杯身・蓋をセットにしたものを積んでいた状況がわかりました（図4、写真7）。このように古墳時代当時の窯詰の状況がわかる好例で、6世紀前半の須恵器生産技術を考えるうえで重要な資料といえます。

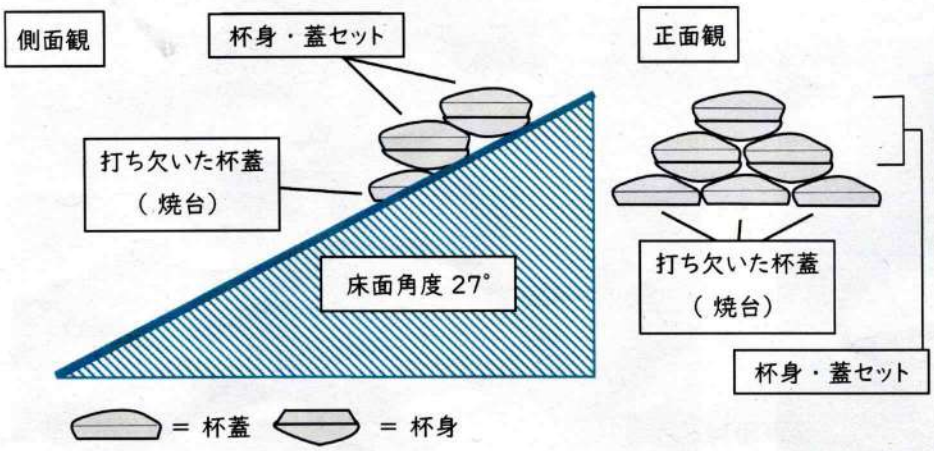

図4　3号窯窯詰模式図

写真7　3号窯の遺物出土状況（部分）

一方で1号窯は焼成部に須恵器があまり出土していない点から、操業が終了し、製品を取り出したのちに時間を経てから天井が崩落したものと考えられます。また焼成部において側壁にスサ入り粘土による修復が認められることから、一つの窯を補修しながら操業していたと想定されます。

そして4号窯では燃焼部および焼成部に多くの須恵器が残存している点が特徴です。これらは完形品が少なく、破片が多いことや焼成不良品が多く目立つ点から、3号窯のような窯詰状態を示すものではなく、失敗品が選別されて窯体内に廃棄された状態と考えられます。

☆周辺遺跡との関わり

本調査では装飾付須恵器や子持器台といった古墳に副葬するための特殊なものが出土しているほか、杯や甕、土錘といった一般集落で多く確認される遺物も出土しています。こういった状況から沢組遺跡は古墳造営者ばかりでなく集落側の需要にも応えて須恵器を生産していた遺跡として評価できます。本遺跡で製作していた須恵器はその年代観や特徴から、遺跡の北西に位置する曼陀羅山古墳群や南側に位置する神田遺跡などの集落に供給されていた可能性が考えられます。

○おわりに

沢組遺跡および周辺の須恵器窯は従前の調査や研究、採集資料によりその成立時期は6世紀後半以降だと考えられてきました。しかし、今回の発掘調査によって6世紀前半には須恵器窯が操業していたと考えられ、6世紀前半から約100年間にわたって窯業生産が展開していたことがわかりました。

沢組遺跡の調査成果は周辺の集落域（神田遺跡・普門南遺跡など）・墓域（曼陀羅山古墳群など）とあわせて、古墳時代当時の周辺環境を復元する資料の一つとなります。